

宇都宮市幕田の 戊辰戦死者の碑

宇都宮伝統文化連絡協議会 柏村 祐司

戊辰戦争は、明治元年戊辰の年、薩摩・長州・土佐藩らを中心とした新政府軍と、旧幕府軍および奥羽越列藩同盟が戦った戦争である。栃木県も戦いに巻き込まれ、特に四月十九日から二十三日にかけての宇都宮城の攻防は熾烈を極め、市街地の大半が戦火を蒙った。また、幕田も攻防戦に巻き込まれたのである。

幕田には、戊辰戦争で亡くなった若者の墓碑が二つある。一つは「戦士死十七名霊」碑であり、もう一つは「官修墳墓」である。戦士死十七名霊碑は、幕田の戦いで亡くなった十七名



幕田南原墓地にある戦死した軍士の官修墳墓

の慰霊碑である。

幕田の戦いは、宇都宮城をめぐる旧幕府軍と新政府軍との戦いの中で起きた戦闘である。四月二十一日、壬生に進駐する新政府軍が、宇都宮城の奪還を目指すとの報を受けた旧幕府軍は、幕田に本陣を構えた。一方、新政府軍は安塚に本陣を構え相対したのである。二十二日、雨降る中午前五時頃より旧幕府軍約六百、新政府軍約五百の両勢力が激突し、午後一時頃まで戦闘が続けられた。戦いは、新政府軍の勝利となったが、この戦いで新政府軍は、死者十六名、傷者四十三名、旧幕府軍は、死者六十余名を数えた。旧幕府軍死傷者六十余名のうち十七名が会津軍の若き兵士であり、戦士死十七名霊碑は、この兵士の慰霊碑である。

言い伝えによると会津軍の戦死者は、無残に見捨てられていたといい、それ見かねた村民が共同墓地に埋葬した。明治十三(一八八〇)年になつて、

幕田の名主坂本藤三郎等村の有志が改めて慰霊碑を建立し、その後、現在地の旧栃木街道と兵庫塚安産稲荷街道の交差点に移転された。『姿川村史』には、ここで戦死した弱冠七歳の会津藩士の襟に「親に貰ふた腕脛を 御国の為に盡す此時」と墨書した布地が縫い付けであったとある。十七歳で覚悟の歌、あまりにも哀しい話である。

もう二つの官修墳墓は、宇都宮藩の軍夫として従軍し戦死した幕田の若者の墓で、政府が墓の維持管理等の資金を出したものである。宇都宮藩は、新政府軍の一員として宇都宮城攻防戦の後、会津若松めがけ会津西街道(下野街道)を進軍した。この時、兵力を補うために、食糧や武器弾薬を運ぶ軍夫を徴発したのである。軍夫の中には、宇都宮藩士とともに戦死するものもいた。宇都宮市

立姿川中央小東側に戊辰戦争以後太平洋戦争までの旧姿川村で戦死した兵士の慰霊碑があるが、その中に戊辰戦争での戦死者として、軍夫福富清蔵、増山熊吉、荒川平吉の名がある。三名とも幕田出身者である。

小林友雄著『宇都宮藩を中心とする戊辰戦史』によれば、福富清三蔵は、九月二日会津本郷村で戦死、享年二十五歳とあり、幕田の合の畑の墓地に墓がある。増山熊吉は、同日、大内宿の会津若松寄りの下野街道火の玉(氷玉)峠にて重傷を負い、十二月二十六日没、享年二十二歳。荒川平吉は、九月二日、会津若松郊外の飯寺村にて戦死、享年二十三歳、両者の墓地は、幕田南原墓地にあるとある。

戦死した若者は、自ら志願したのであろうか。否、家計の助けにと、出役費をあてに戦場に赴いたと思えてならない。これも哀しい話である。



会津藩士の慰霊碑
「戦士死十七名霊」碑